

---

# 風の吹く港町

N澤巧T郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風の吹く港町

### 【Zコード】

Z0792E

### 【作者名】

澤巧一郎

### 【あらすじ】

波打ち際に座っていると、目の前から巨大な水柱が飛び出してきた。

「どうしたらいいんだろう……」

海に向かつて一人呟いた。

僕一人だけが座っていた。

正直な話、すこし恥ずかしいんだけれども、この時、僕は今にも泣き出しそうだつたんだ。

プシューッ！－！－！

突然だ。

ああ、あまりにも突然だつたね。

海の中から、いきなり水柱が飛び出してきたんだ。

10mや20mくらい飛び出したと思つちゃいけないよ。

あと少しで雲につきそうなくらい高く、サクラが舞い上がるより、ひばりが巣立つときよりも、比べ物にならないくらい勢い良く飛び出したんだ。

だけどその時、僕が抱いてた驚きなんて所詮ビフィズス菌みないなもんだったことを、このあとすぐに痛感したんだ。

山だ。

山ができた。

僕の前で、水の山ができた。

立とうと思つた。

一眼散に逃げ出さうと思つた。

だけど、腰から下がまるで糸こんにやくみみたいになつちゃつて、いくら力を入れようとしても立ち上がることができなかつたんだ。

そんな僕に大粒の水滴がびしゃびしゃ当たつてきた。

山の水が滝みたいに流れた。

そして、その中から見たこともないくらい大きな大きな生物が現れたんだ。

「やれやれ、1000年ぶり、ん?違つか、200年、いや300年?まあ1000年も300年も変わらんか。とにかく久々に息をしに地上に出て見れば、なんだなんだ、まだ若いくせしてそんなため息などついて」

たぶんこの時の僕の目は、どんぶりくらい丸く大きく開いていたんじゃないだろうか。

当然この状況で声なんて出るはずもなく、僕は考へることも息をすることも忘れてしまつていた。

「おい、どうした。お前は石像だつたのか?さつきしゃべつてたら思つたら急に黙り込んで。それともシャイボーイか?はじめての人とは口が聞けんか?まあそつ緊張するもんじやない。同じ命を持つ

た生命じゃないか。あつはつはつ……」

体と同じで、大きなくくりだな。

なんてこの時は考へてる暇はなかつたんだけど、僕はゆつくりと息をするこことを思い出して、その次に声帯の揺らし方を思い起こして、やつとのことで声を出すことに成功した。

「あ、あ、あなたは・・・? なに・・・?」

「なにして、やつを言つただろう。息をした上がつてきたんだよ。それよりお前はどうなんだ? いつたいどうした?」

本当は「何しに來た」つてことじゃなくて「あなたはいつたい何ていつ生物なんですか」つて意味で聞いたんだけど、この時は訂正しよつこにも心臓が激しすぎて頭で考えるのが億劫だつたし、なにか気に障るようなことを言つたら食べられちゃうんじゃないかと思つて、素直に質問に答えた。

「ぼく、迷つてて。それで、考えてて」

うまく言葉が出てこなかつた。

いいたいことはあるんだけど、なにせ口は一個しかないし、どうにも狭いもんだから、こんな言葉しか出てこなかつたんだ。

僕は続けてなにか言おうとしたんだけど、今度は完全に出口で詰まつちゃつて、なに一つ出すことができなかつた。

彼は僕がもうなにも言わないことを確認してから「」と言つた。

「悩みか~。うん。悩みことはいいことだ。悩みのない人生は太陽のない地球みたいなもんだ。何一つ始まらない」

そうこうして彼は田のよしのものを閉じて「うんうん。」そうだそうだと、まるで自分に言い聞かすみたいに言葉を発した。  
そして、まるで思い出したかのように僕のほうを見て「それで、その悩みとはどんなものだ」と聞いてきた。

僕はまだに落ち着くことができなかつたけれど、なんとか伝えようとして一生懸命になつて話した。

「ぼ、僕は、続けたいことが、あるんです」

「うん。」

「だけど、それを続けるには、ほかにもやらなければいけないことができてしまつて」

「うん。」

「僕には、それをやりながら続けることなんてできなくて」

「だから、続けることをやめるか。それとも新しく出来たやりなくちゃいけないことをやめるか迷つてて。」「うん」

「新しくできたことをやめればいいって思つてるかも知れないけど。それをやめると僕の大事な人たちが、大変つらいで田にあつてしまつんです。」「うん

「うん」

「だから、僕は続けることをやめようと思つてるんだけど、だけど、やつぱりやめることなんてできなんんです。」

「うん」

「僕には、それが、すべてだから・・・」

彼はやつぱり同じよつとして、田みたいなものを閉じて「うんうん。そうかそうか」と、まるで自分に言い聞かすみたいに言葉を発した。彼がまるで思い出したかのように、僕のほうを見るのを待つた。

波の音が、静かに僕の住む小さな町へ進んでいく。

ふと、僕はいつになにをしているのだつと考へた。

突然現れた彼が、僕の悩みを解決してくれるなんて、ほんとに僕は思つてゐるのか。

僕は僕に尋ねた。

だけど僕は彼の言葉を待たなくてはいけない。

僕の言葉を聞いてくれたんだ。

それだけで十分だ。

「続けるには」

突然、彼がしゃべり始めた。

僕の耳は一気に集中した。

「やめなくひやいけない

もしもこの場に鏡があつて、僕が自分の顔を見たら、きっと頭の上にハテナマークが出ていたと思う。

彼がハテナマークを見つけたかどうかはわからないけど、彼はもう一度言つた。

「続けることはやめなくちゃいけない。うん。続けることはやめる」とだ」

このとき僕の中に生まれた落胆を、僕は今でも彼に對して申し訳ないと思つている。

彼は僕から反応がないことをたしかめて、ゆっくりと説明を始めた。

「なにかをするには、なにかをやめなくてはいけない。たとえば、そうだな。心から笑うためには、怒ることをやめなくてはいけない。」

潮風がさわやかに吹いていた。

「呼吸をするには、息を止める」ことをやめなくてはいけない。何かをするには、ほかの何かをやめなくてはならない。それと一緒にだ」

砂浜の砂がチリチリと走つていた。

「なにかをし続けるには、何かをやめ続けなくてはならない」

白い砂せきりありと走つていた。

「はじめる勇氣を持つことは、やめる勇氣を持つことだ」

僕の田からきりきりと流れていた。

僕に足りなかつたもの。

### やめる勇氣

僕が今しなくちゃいないこと。

「僕は……逃げえることをやめる……」

彼はなにか満足げだつた。

彼は大きく大きく息を吸い込んだ。

世界中の空氣が、彼の大きすぎる口の中へと吸い込まれていく。

倍くらいに膨らんだ彼は、にこりと笑つて戻つていった。

再び独りになつた僕は、新たに生まれた勇氣と共に、家へと帰つた。

すごい風が吹いたあと、僕は今でも思つんだ。

彼が呼吸をしに現れて、もやもやした気持ちや、嫌な空氣を全部吸い込んでいるんぢやないかつて。

あの時と同じように、すがすがしい気持ちになれるから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0792e/>

---

風の吹く港町

2010年10月14日12時08分発行